羣書類從

二百卅四

和書門
類
九五九五
號
二〇四
函
五
架
六七〇
冊

内閣文庫
和書
九五九五
類號
六七〇
冊
二四
函
一七
架

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670 (297)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第二百二十四

檢校保忠集

和歌部八十九 家集七

一橋本集

春

内閣文庫圖書印

ゆるこ[illegible]をはくれ[illegible]ゆき[illegible]日[illegible]にもやとにそり
さ[illegible]ふこ[illegible]月をとゝ[illegible]かつれ[illegible]にまの[illegible]の[illegible]ゆけるそも
あすらふ[illegible]ゆ[illegible]ゆんと行[illegible]れあ[illegible]の[illegible]ふ[illegible]
梅の花をれとをりんとすゝ方れあ[illegible]
誰の[illegible]れ梅の花をも[illegible]

来てうゑし人もいかゝあらんに我宿の梅乃初花哉

我せこにせんとこゝにうゑし梅花それとも見ぬ宿の人かは

梅乃花まつさく枝をたゝにこそ折もくしけれとへてもうん

宿さむしとはせをとさかれぬ梅花のかけこそ人をとはゝ

梅花さかりく散とはまつぬるを今朝ゝ咲ぬ梅乃ひとえ

ひろ宿にさゝと散梅を月清ゝそのゝくさつゝん人もなか

風さやと落こゝにつゝし白浪にうゑほの見夕毎ゝ

にのゝに鶯なく更ゝ花され家をさむしとまくらせん

ひろせをとはらゝ花ふこゝ若ひうゑせ恋の涙ゝよ

ゝとにゝて雲井にゝゝ梅乃ゝて折ゝ散花とゝゝ

朝ゝくひろみゝ柳常花さるゝくゝゝへさ時ゝ人あらゝ

こゝゝゝゝかゝゝさゝゝとゝゝせゝゝゝゝゝ

青柳乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玄葉のゝゝ柳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今ゝゝに宿柳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

春葉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玄さゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玄霧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

橘花枝よりなるまてこそ宮ゐすれ　ほとゝきす

夏

我宿乃池の蓮浪さ紀ゆ乃ら山かけ　にほ鳥さわ

きこ江浦よりく蓮の花をゝくらゐ　ひとの

田子乃浦そこさへ浪ゆ蓮かけて　ゆ乃むこ乃人の

時ゐ乃ふ江ゆ乃ゐ乃の花のうさこと　いまや若くさ乃

時ゐ乃なくや五月乃うゝ　かゝ乃も　橘　ゆ乃ゐ

ゐ乃ゐ　橘　ゆ乃ゐ　我宿の花橘をとこ　ゆ乃ゐ

我宿の花橘に時ゐ乃さけ　ゆ乃ゐ

ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ

我せことうら乃ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ

ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ

萩の花枝もたわゝに露の　ゆ乃ゐ

遊覧に村雨ふる日くしれる　ゆ乃ゐ

秋

天川そのゐ乃ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ

天川とゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ

ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ　ゆ乃ゐ

波ゐ乃ゐ　ゆ乃ゐ

年にあひて一秋妹こ　ゆ乃ゐ

うれしさはこよひつくしてあはぬまはたのこゝろや我思ふらん

あまをすくハまさなのさ神を天河すゝくハせあし秋の涼しさ

あきすくハけふのこゝろを天河つらくハ又そまつこひをせん

彦星とたなはたつめとこよひあはん天河原に涼立なめ

天河霧立のほる彦星のかちおときこゆ秋の更ゆけは

天河打橋渡し妹の家にやまず通はん時またすとも

天ハ川せゝはやきかもむハ玉の秋ハ涼しとあかぬ彦星

銀河秋ハ涼しくてさぬるよなそしらすきりにまつよの

たなはたのこよひあはなハつねのごと旅をへてろるをあからん

天河こそのわたりハあせにけり花のこまさんかたよ白波

天河せきてかへらは波なれとわたらまほしきまてハけふのうちに

妹にあふことさへまつと久堅の天のかはらに月そへにける

思ふ人はけふのこゝ神をこよひさへとりてなるゝ河へとさ

彦星のつまよふ舟の行ゑのしらんと共にいさよふ

彦ひの山下にとよみゆくなるに秋といはんや

こよひこそ逢夜ならめ我なれハなかめしくもあはぬ秋の初風

夕立の雲ゐるまにも日暮の尾花かうへの露のまにまに　同前

吹くれハ秋風吹ぬ白露のあらそふ花のおそくちるらん

て風もなくうつろふ葉ハをおくまて暮るに此秋萩咲にけるかも

秋風を待まつしく駒ぬ駒なへていさこのまにうつる秋の色に

白露のおりはへくとも見ぬ秋萩を折てぞ見ぬ人
秋の田のかりほのやとの苫をあらみ我袖ぬれて
露はこぼるゝ露ぬれてかりほの秋萩こゝろ
我袖しぬれぬれとも萩の花ことゝひらけぬ
旨人は萩と秋といふなるを尾花のみを秋といはん
主はこれ花かつらいのもとをわるゝ秋萩こゝろ
こゝろのうつさ秋萩ぬれしかり金の夢ゆる宮月ゆるる
家宮にさける秋花あるこゝろ我袖人のこゝろ
我宮にうゑ〳〵る秋萩と誰のまめさ次我ゆゑ
うゑもこゝにもあひのうゑゝ秋の花

わくらもあのひのもぬるし七植し田とゆゝて
秋宮花さるひくとゝ秋の花今や散らんいまこゝ
こゝ〳〵こゝにぜうとわるゝ植し秋萩花咲こゝ
秋され妹よこぜうと植し萩露しもおくく散ぬる
秋萩における白露をみくゝと秋これおける白露
白露と秋の花とこゝ紅のせくゝのくゝとゝこゝ
ゝゝの秋風さむこゝの宮の萩乃下紫ゝゝ
秋萩とおくゝする秋ぬる花ひとりおくこゝ
秋風ゝ日ゝ小夜ぬる松の陰ゝ乃秋萩ゝ
明ゝ金のゝこゝうゝ日ゝくゝこゝ

月の夜すがらるるかのあらすうの松の雫と別のかの萩のすがるを
さそはんともまつれ我ならたにあるんは萩に出てをんな
こゑかしかしく我はかの萩萩に牧もたりに鹿の音はけり
秋風の日とふ吹はまもなく萩の上葉にいろはきそめけり
秋萩をちりかくめこそ出てこりてこれもあるにあらしあれを
夜をさむこゑ夜の月金鳴るに萩の下葉をつるさにその
撫子のあさ花をとれば草わけをかくろひのきくんまるる
うの金八今をさかりぬるの絵にはやはまはてるも
虫金の初雁の雲てちさてこる雁への秋萩をふこわのせこ
鳴金を雲つる雁へよるる松乃雫さりく真はいろ分にその

ふるはさひをさ乃寒るるんを日の山をりてこすをを
うの月の月雲りにあすりは月もおの萩をあるん
鳴りをのさむく鹿より山の色の紅はいろ分にその
秋風乃さむく吹るよわの岩れ流ちる末はい流つをを
鹿のかはあさ寒ぬをく咲とはいへと分新のをを咲りをを
をにとれは袖をくはりは女郎花本や寒にもの海をを
をををにに寒はすくし女郎花をを雁をを宮ひてをん
ふちく寒をををれ小梅廉乃花を雪つをい梅んはこをを
こうけ雪れおひをる岩れ夕寒よ鳴りくくくは雪をあるか
是にの小をる海をは梅廉の素をの小雪ををををを海をを

夕のけしき嶋日ゝ[illegible]れそくに秋日ゝ小雪とゆかめ[illegible]
我宿の尾花ゆ[illegible]ゝ[illegible]ゆく霧のそこ[illegible]
秋ゝれ[illegible]ゆく白露に[illegible]ゝ[illegible]
秋風の日ゝよ吹[illegible]
[illegible]
秋の花咲[illegible]
[illegible]

詠花

白露にあらそひ[illegible]
[illegible]

たつゝ[illegible]
むしゝ玉の秋中ゝ[illegible]
庶乃芳ゝと
[illegible]
秋萩乃[illegible]
山へ[illegible]
[illegible]
[illegible]

法ゆかしむ

白露をそこなはぬへくいさゝ小萩の遊せん
面すくなみ物ちる山ハ今ぞ白露おもくゝ紅葉ちる

山とゝむ

暁乃時雨れ面ぬまてうすいろ付ぬ
秋山をゆめ入くゝ言れ
面おりふとゆくれのこゝくけ
紅葉ちる時ハ数じ法ゆ人のゝ
田にゆく
秋乃田れゝむけれ風のゝ

ゝ我ハ面おりふつまこゝ
ゝ橋をりゝ人の数のゝ
庵にゝ
撫子のゝ
日の暮れ
萩ゝ
故里れ
ゝ
秋乃
ゝ
秋ゝ
秋萩

撰藻集とまの上と詠霧れいそんうそこ見ゆ音ひば萩葉
なと、藻のうひるはすもんのそしても秋の立秋に去けく数ら
生河乃山乃末うけ水鳴集の霧も紅葉すく山田あらすと
こさうくすとうむ
秋風ふさもく吹ありわ雁れ海ちうとにさうりくらく
秋の雁く尾花のく秋水鳴出乃霧と学さう我も家妹も
秋萩乃枝もたくに露も秋の数よけうの秋
芦ハも見ハとのにくれるれいるにあの秋の山る
いもの袖ふされ秋霧とひんる紅はちれるくうとこと
る紅葉と秋月ひはけく紅葉ともつ海る秋末とれうん

露霜乃さむさ夕の山風ふる紅葉に秋う露る秋
ハうもれとるさうかてうう夜出る面の山ハる紅葉てし海う
風吹いもうちぬつもくてくも我まつうにさまうちなるに
妹こそ今ふくてくも伊弱山ことくれるりうち数つ
秋萩乃下葉のもとう色紅葉ハ出く時色ぬまハ後立んぬも
色付ぬる時の月も早うこ妹うくあとを海る世日を
くしる舟れハ海乃ハ紅葉ハ山の色付うれハ
あやくくとるるねうあの白露乃おくて秋ハさハ北西と
りう雁れ波ちを海くも色付ぬまくこぬ紅ハるに乃んうを
秋霧しかとろへなんと出ぬる時に出つさとくハのを

妹をもとめてとひすてゝ立田山今こそ紅葉そめてけり
足引の山田もいまはひてすゝもつるこにてくよりとそ
たのまれぬのけさ吹てる紅葉くしたる秋の月かな
秋山の紅葉くもいまゝこそけさ吹風に雲もまぎれ
妹をこひとこ丸池の波まゆりこそ紅葉さかりに
ゆふくれていとにはなん神無月紅葉そこん

天皇三月のもちゆふ幸まけるゆふ御供よりて紅葉
ゆりこそ　天皇御製

立田川紅葉そこれて紅葉のめり波ゆふ紅葉や絶るん
とありけるゆふ

立田川ゆふ紅葉のもちゆふ紅葉ひろの山に紅葉ぬるら
ゆふ紅葉の面にはくし陰に紅葉の葉もゆふ紅葉ひ
ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉
紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉ゆふ紅葉

いとくらとをよりみるのくもさらに雪のゝまてるふ
やまもはなをおもひうつくあらしの山峯のわか雪をくそをら
あさ月の雲はくもるはへ〜こう籬のうちは雪けさこそ
ことなるゝ袖さへぬまてくはるゝん雪の空ハ時
漢雪ハ雲さりる後そ白ぬの袖まさはさうん妹かいるに
いとはくるふらぬ雪のとをとおはまにあまるそそハ是をあひて
妹ゝ歌ハ我まとりはゝ思乃雪ゝり雪はるて物まてを
ゆさにあひさく
後雪はるに雪ぬへしゝるもあふくとをとをへ
さてはるにはるゝ雪はひまるゝ雪はるゝ我ゝ

霞ぬりはるゝ雪ぬ雪さとはるゝ雪のにこ雪ゝりの雪
あはをまあの雪はる山の峯に雪ゝ消しとは雪のそのに
はるゝ雪はるゝ雪乃雪ハ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ
我せとゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ

蓋天

あめはるゝに雲乃涙を月のゝ星乃ゝやしに雲ゝ

月

雲ハさもゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ月乃雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
はるゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ月新ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ

百敷の大宮人のまうのぼりしたふこゑのあけぬ
ますらこそ思ふ　新古今

雲

足引の山川乃里にあるまへにつくこゑなくて雲立ちにけり
おほうみ　出典未詳

我せこかそこ思ふらんに湖水なる白雲
我せこかそこ思ふらんにたちわたる白雲

山

なら神社　出典未詳

いまゝへのとしをかさねて我こそは思ふ人のくやしき
大宮のこゝろ　出典未詳

袖石川乃山とれさ

千鳥

さほ川おいたちうれさの鳥ぞ鳴　夢ぞ思ひこそ
みちの社

皆人の寄ってうれ　出典未詳

うち川おいたちうれさの山川さ
波乃くま

さよの浦　出典未詳

いとはあらぬ　出典未詳

すみの

住吉社　出典未詳

住吉社　出典未詳

白波ところ

すまうの丸奥津白波風吹ハさとの松ちるもゆとそしらるる
タさるれ〻ゝ桃花とするのゝ山のまとゝ舟おさうめうに出る第八
接にくるの先百
第百〻江接にしいまゝハ社風のうしひさうのゆうさる
紀伊国
おほ〻浦うれしもいの浦いうまてうこもうん高のゝあ
むしまの丸黒うゝ山と紀ゝ山下つ浦ふぬきにけるゆも
さ浦山にる引雲の高ゝ浦ハよふんといはそさこる
もろ〻にまりてゆりとさて
あ浦ふやゆりの丸後もゝうくゆれるゝ丸新にとそゆん

芳野山に御幸の時の歌
ゆされハ桜風さむゆやゝさもおゆとゝおあひさゆ
おほるむちすくゆゝゆゝ丸つゆ桜いもせの山とゝれとも
ゝうハるゆ浦むもうくゆとゝゆゝ浦ゆ桜ゝとゝ雲
ゆるゆせ丸くゆ浦くもいつまくゆ底ゆて紀ゝ強桜ん
いゆくにゝゝまんくもうゝとゝ金ゝ嶋のひとゝにゝゝ桜ん
浦のくゝと明石の浦の松蕃に出ゝくれもゆとゝそゝ
近江ゝ丸行ゝ宇治川の浪とゝくゝある
ゆ丸浦のやゝゝち川の網代ゆにいさゝ波のゆ出ゝ
諸丸ゝ 伊勢丸ゝ浦さ丸御

神風やいせの浜荻折ふせて旅ねやすらむあらき浜へに

石見の国に女をおきてのほりける時の歌

さゝの葉はみ山もそよにみたるなり我は妹おもふ別れきぬれは（みたるとも）

川の瀬のうつまく見れは玉もかるちりみたれたる川の舟かも

あふこれ[illegible]おもひてよめる

さゝ波やおほ津の宮の名のみして霞たなひく宮木もりなし

さゝ浪や志賀のからさきさきくあれと大宮人の舟まちかねつ

（生乃海イ）あふみの海[illegible]

[illegible]

[illegible]

志賀の[illegible]

石見にて京をおもひやりて

石見なるたかつの山の木の間より我ふる袖を妹見つらんかも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

岩代の野中にたてる結ひ松心もとけすむかしおもへは

[illegible]

白浪はまとゝ夜にいるゝ波の花は春も秋の風もおのゝ
草のゝ枝の梅藤はみゝとゝ称とも妹のあるゝ
美面に夜のいるゝ月はゝ妹の面ちゝ
胡さゝ夕はまゝ月美れうゝ人ゝ
ゝゝ川ゝゝ世ゝゝ我せゝ
様ゝゝあゝ称する歌の立ゝ家の方に花せゝ
いゝゝの物ゝゝ歌ゝ花ゝ小松ゝ昔生ゝ
紅ゝゝすゝ恋ゝ美花ゝ美ゝゝ
ゝゝ秋風の様様ゝゝ妹ゝゝ
面様ゝゝ又ゝ物ゝゝゝゝ

物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちくらに入ふしてとうえんあるて白さこゝろ云
せんとう云
うちひさすやちにのろ妻に称うたまはをのおりひみ
あまて称ゝ歌てあれこさ
かの島に萩うゑてまてるうそうたくも美からあえん
こゝろくさふせん
おすいかうえんとふ妹よあるんもをれをたのあも
こゝろ高のたけをこれは
ゆるし　ゆるしたう称へ身をあけるはのかす
はな波屋をのれてゝろ武まりにいはをれをとしふるも

さ波やをの屋のたけをこゝろのとひもいけくに父おうあ
はなをはのはなかう称へのあるけうと
ふ見もこゆ称ゝれこゝとはのはの池のおもとみゝるゝ
ゑるこれう歌へゝ
ゝ見れあれたるをこゝはのこてれあまこゝ
さめこれゝ称のゝ山ゝて見れてゝなゝあれるゝをて
はまのはゝゝつゝてのまはこの山ゝのおゝゝにるこにあゝゝ
おゝこは浪ゝるはゝゝいをゝ安ぬれ桃ゝてもるし名美ゝも
めれをにあゝをゆゝゝゝゝゝめ歌
家にいゝゝて我やをゝれ安ぬれゝゝてあゝけゝ妹ゝ桃

四へうとて秋風おもく流さるゝ
去年うせし秋の月おもかはらぬ
あるものの女王をおもひ出る時よめる
龍田川さくらをなかれてせゝの花流るゝもなを春
京にて北帝をおもひ出る
久堅の空に出る月日をまつ人の恵
なんにとゝくれて
秋山の紅葉をとゝけこゝろひめる妹をもとむる
石見にまかりなりぬる時よみて
いも山の岩根をおもひ我をもまつらん妹の袖
かも山の岩根のつゝみ我をまつらん妹の袖
おもひ出にまつ出けぬ
神風の清き夕の潮あらはるゝ月人男
秋風乃吹に白き天川せにいそぎて袖つとゝ
恋
我ゆゑと我恋をれば我者此人ゆゑ
湊入の芦分をゆくこゝろ
こゝろもてつゝまくおもひ
見し乃山下とゝ
よそにのみつゝ恋むれば

ゆくすえいかにさいもそれあはくゆくすえ人も知ぬ命をたつてやはんん
恋ゆゑて後もはたらんとるくさいさくるくふいさくはめや
月さはれはあるらむ月さも去て稀て物(わらうと)も人さまんも
恋するふさにするあるいはせはいたにかはら
掉床の長はなやめいちまくるぬよ人の去るるむ
長川乃山下水はいつるとさ去のこぬよふうきてさらしてを
とふかくにはいおもくすおくてくさ折すさなのかさこにに

さそひのうさ

とふりまふいさふ社のお業とも去ものをこてあるとりあと
恋て去ものくるやりさも不ぬ我ゆ氣のつと色てはいら義

ぬすらとはうくも我いるるるるわすれ恋るわすれ
こひつもさふくはは霧くるあすはまるといくくるん
山のくとさ出る月乃とつくい妹をそこはる恋ふさ海に
まあるにはるれはるれはうあと去ふの朝に恋海さもはるの
ゆくふりる恋はれとさふ海せふのそこにそみはるるるまんあと
恋くなのこひもくはとやおふ祥乃君り人よこさるてもる
笑祥ふさゆくさるるふはつてこてとのあ日数と恋ふさるるも
はるふさはあくさはは夜のうにはせふ我の袖紅めや笑うさ海あ

八さひの女はは去さくくのみこに去るる

袖はは袖くくさおさはは袖くくさおさはの去はせるる消てあんや

さほらぬのひとことれて立嫁まちも我そ何為とさまにもさき

足引乃山田もる庵におくかひ乃下こかれつゝわかこふらくも

おもふかと思ハいへともあふ事をいつと知てか我こひさらん

おく山乃岩かきぬまにこもりにも立や流らんあふよしをなみ

あふ事をすとのいも妹かいとりん秋萩のその初花のわれさくはかも

秋萩乃咲散のへ乃夕露にぬれつゝ来ませ夜ハ深ぬとも

長月乃有明の月乃ありつゝも君しきまさハ我こひめやも

まくらこもすにお坂山の志乃薄ほにはいてすも恋わたるかな

都ハさに夕ゝまきハむ月葉けのくるに立も我ハけするかな

君こさらい成里にさひつハけらすハ咲て散なむ花見る

秋の夜乃月の光の萩ハ雲ゐかゝれたるも手ハ立ぬへらなり

君かあたり見つゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨ハふるとも

きのふの日の暮方になりぬれハあすこそ立こそまされ

思ふ事と庭よりそれハうちもさへ我思ふ事に寄まされ

住よしの岸を田に堀蒔し稲のかりほすまてもあハぬ君かな

こゝろもする猪名のをかれハ堺らて立そ増さる

紅のあさハの野らにかる草のつかのまも我を忘らすなくに

あさなよの嫁る君雪と浅けの我ハ我さへも清めへきに

足引の山さと山にある雲の立ても居ても妹をこそ思へ

風吹ハ浪こす岸の松なれや根にあらハれて泣ぬへらなり

みくまのうらなれるあまもくちにけるこれはたゞ明の月のみつるもあはれをおもふくゝ猶人もおもしるもとしていとまゝ哀にそおもしろき白いの色ことに出くいたゝゆゝしきを白泉の白ひかりけぬ哀もまさる民あつをうゝ知ることひとすゝこゝ波をこゝにこゝにそ知たる哀にてそ思たらち嫁のおやはこれはまこゝろいとをもうつ妹にあはてを哀東知くゝ泉の松にたゞ民のやむはもなく我哀らくは牡鹿の消ゝ消すゝ哀へゝもいとくゝこゝのひとあゝつるもちゝやはゝの祈のいのゝゝもゝ誠ぬゝとゝ我身のそはけるも一ゝ哀ゝひはまるゝ波をゝ哀のゝゝ波のゝ色に染にゝり

皆人の笑にぬれてゝ哀波もはてゝ哀波にぬれてゝ哀
ますゝゝ哀にゝり猶くゝ牡鹿もはゝぬ哀にもゝゝ哀
牡鹿ゝゝわまゝ哀つゝゝ波ゝ哀ゝ人のゝ波ゝ哀ゝ波を
久哀はわ波くゝ哀月をゝくゝ哀ゝ妹を哀のゝん
二日月のゝ哀まゝ波ゝ波雲ゝ哀ゝ哀ゝ哀
あひゝゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀
哀はゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀
哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀
春日山雲井ゝくれて遠ゝ哀ゝ哀ゝ哀
ひゝゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀ゝ哀

我かせこをこちこせ山と人はいへと君もきまさぬ山の名ならし

難波人芦火たくやはすゝたれとおのかつまこそとこめつらなれ

これ山乃岩に近しとまつみ清る月か思ひなる心もするかな

みしま江乃玉江のこもを志めしよりおのかとそおもふいまたからねと

久思ひおもへはこさぬをとはやしくも我夜そねる時もなし

波まよりみゆるこしまの浜ひさ木久しく成ぬ君にあはすそ

夜草乃露ふけ夜さもせぬよおなし我か袖のひる時もなし

真野りやハ世の津乃つきはしを忘れかねつゝ妹かこひしき

夕されハ思ひまさると袖しほれ君をまつとそ今もいねかてにする

妹かめを見まくほしさにたちよれは小雨ふりきぬ心もしらて

まつもこハ夜ふかゝらん秋風乃さむきこのころ志たにきなまし

わかやとのこなたにうつりかはるハいつも真そらも思ふむかし

山ものゝ夕日かくれのあさちふ後うへん為に志めてゆはしと

松板もて物ける板戸はおしこちいまかせんとかあへこそめせん

槙宿乃いたれはすそ秋のゝはいつしか妹か手にまくらにせん

萩の花咲て散ひき秋萩ハさこそ散ぬに見えぬ宿のくに

はらはされおはなの下草露とはしはらくはかなしてかれんあや

三輪の山やまししとゝのこりなれ三て絶すハ後も我妻

あらちとめ乃かるやれさしの玉簾もいと我てこく抱ハにく

ちゝやめる神のゝすりたる命やとも我か為そのハまくことをせん

ゆくすえのおもてる月の雲間なきをもとこそまて我ぞとなくゆ
いへの母はゝ雨もはさとに妹とおらえて雲やすらてゐむ春日を
天雲をとらくはゆめさ分あまくゝろ人も何せん妹なのたすハ
おと絶て今いこうとハ思ふもたゝあくぬん程ひよ雪り
梓弓ひとり指くゆるさぬにとろ心ハまつ雲
今もおりひ後も忘れ〻ゆりこもりてのこそ我恋ゆさ
手枕ひさ人も待つまハ面と境ろと愛にろ乱恋まろ
あひ思ふ妹ハ何せんうハなのつよも愛りふこもこるくに
夜叉の志げよりろ恋信吉は髪の白なるこの宣はつを
さうまゆもまハふるなるとゝてこに人書るよいらひぬ物も

ゆくすえたとふたゝひら母の涙ろこひてゆくこ面すたえんと思ふ
拙ゆくゝこひそれてあゆ雲のゝ面をふんりろふてるに
我ぞこゝか家と損て笑ふ小すけ笠ととろて形ふ
妹こて何もつてすいそれ思ふ我ゝすろかれ
久されハ妹ゝよ思ふ浦ろ月にそつこ恋ら乱ふ
妹を思さほ山乃松のゝれ根もひみまくゆゝさ思ふか
ゝくゆのに立紅葉ハ絶すして我ゝ思ひえんゝんと家
後つひよ若とうんろくまるひさわゝ思ふこに雪れぬゆ
寄ゝくと若と後ゆれ雪ぬまハなゝ紅ゝとおりひをつる
雨姫ろにハ源よ寄り今更よ若さ面さあや誰ゝそ様し

ゆくてもえしわすれぬさこそ命もまつ浦の年八十の春
はるも月ゆめのゆめ時雨くもるまよひとなれも妹をあつひをつく
くえんゆとまつ世八搖弓すゑのゆ花ゆへいそ武
いかさこさしたちそしに新ゆりさしひとを稱ゆ恋ゆと語ゆ
石上ゆ振ゆ里ゆ田のかしいすゆのうちにこひやもとらん
ゆの恋ゆ石ゆんとまつ浦つひよゆ恋ゆもあくさらめや
立田山嶺ゆ白雲たゆひいでゆ山ゆ花ゆ散ゆ
あさこつむ玉日ゆ露ゆ春ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
玉柳ゆ恋ゆ春ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ妹とむすひしひとけ
山城ゆ恋ゆくいのゆとゆくゆ恋ゆ恋ゆ

ゆくもゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
いつとそも恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
らゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
秋風ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
玉ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
あま雲ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ
月ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ恋ゆ

枝のことを和し兼ねて事をなすとも志ふかれば
月卿よ哀れけるん和歌よりあまたく其後ふうつろいあるも
夕暮くいのるとひろれ秋さひて妹のあとすゑ今おほえそ
そ人なるやと其まへをこそ和歌のうみこころれるつも
志ほさおのよりもたりそにこそ毎に妹ろちんろあるさ秋にて
紅葉れ散ぬるなんよおもふ章れつひをそれそはひひおも
ぬめのことをすくはのあんはんれるいぬ今て意しれ
人とい友のくまれ生まるとも妹と我らたつそうかハ
比比乃意の志けくい友まれとりそれとも出ひらくうと
いけて花を意てまいるるもれ意に咲ぬんれるくうん

三日月乃出うくさけく照日にも我そてひぬや妹よいのぶ代
秋風よ山花こ面のり金れいやこほうり雲くれ清く
つるさはなる萩のくさうやさ吹風の吹ぬるたのんよ下て酒なる
移風乃意く吹なるわる雲乃清ちうもとに日ろうも酒
これ比乃秋風さしを萩の花ちうず白露おさ乃ろも
おさすさぬけるく我意ろけ面しぬハ行つとけ
秋乃田れのうに出き萩自露乃けぬて我おもはるる
秋の田れりはよつる雁て酒つらん意をろうもも武
秋萩乃枝ものとそに垂露乃消もまの酒しく意てのうも
ともこそは男ハんるものいるうにうるあるにうふなりる

水底かはるもしれぬひとをとてくこてるはの雨
是引乃ふりは出るは月まるとと人はいつひて是をこそもの
なるゝ神は出るゝ（いでゝ）りてはしく墨西もぬるゝん是をるゝく
伊勢はみの紀に京小西ゝりをゝりて
あすは海に花乃名すもむるゝ紀もゝ出そに海やゝんゝ
是引乃ふちも是ゝすを是ゝめて乃枝も葉に雪のふまてゝは
出ゝるゝといぬを（ささねゝるゝ）さつゝちめるゝ（らくゝ）年は（ゝゝ）ゝ（ゝ）ゝ
草枕ひゝ和ゝりゝ雪ハ雪ゝけつゝて（ゝゝ）ゝ川ゝも
ゝゝひゝすゝゝゝに人ゝゝ海ゝ我ゝゝ人ゝゝゝひゝゝ
あゝゝは年ゝゝ是ゝゝゝ川ゝゝ是のゝ西ゝゝゝさ

川西はとあくゝぬあゝ是ゝ人ゝ是ゝ紀ゝ雪ゝにゝゝゝゝ
是ゝさに人ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの木幡乃里に西ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
是ゝは是に数ゝくゝゝゝゝ命是ゝにゝゝゝゝゝゝゝ（妹ゝ）
我西是ゝにゝゝゝゝ妹ゝゝゝゝよゝ是ゝ乃白雪ゝは是ゝゝゝゝ
むゝゝは是ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ妹ゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
暁にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
是ゝは是乃西ゝ妹ゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
安ゝは是ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

誰ぞこれやとて、まことに、たちかへりて、我を
さめるよりはちよりふみをとりわのせこまいりてあるこそ
ふしぎのそふ、誰ぞとも、にうむしたまへるうえをけつりてあるん
はなるこゑくちめやいあや、ゑとこにあるゆくに、ゑをあもん
くらもつまとこつくこそこうんすあるこゑの仮と返しつるのあと
妹ゑとわつかく泪ぬぬの枕とそりてそそ忘ちぬる
そそらてありひるくもそるけくるあるもそそを引後を
心地とあるゆはよりひあるしいてそりもつそれ門とえを
ゑにんくれくはうゑぬるまれりはくにあそちゆている
ゆひそそ、ありくかくゆゑ、ゆくあれりこゑゑるか

ぬかりの人ことそよるれもるこそもみつ、いうちりのもこゆくゆらそも
むとゑ玉の妹ゑ思ふみ今ゑれもやりうれるこゑ床にゆひこそぬるん
いろ小出くくひ八へうるまるぬ、くんのうちれくれ書こうも
あひそ、ふるくちむとくんいとみくれ流こそゑ所ふうし
いつりもいつこそそするはりゆこぬんゆるに忘に去こゑ
忘ちるん後いるにせんうち合いこそる日こそみゆゆりれる
ゑこゆの枕りそれていゑられすれ忘ふりのひそくゆるん
ゑまこにおるうへんぬみそ袖も我りゆゆふ忘のまけこ
ゆくこむりんゆるこにくくてれこ忘や後らん月日ゆこて
いこにりそ忘ろくもれそわのせこに忘ゆまこれと忘れるん

かへしもおとさぬるかおもかけ
をそこのもちのをいさてあるあやうきを妹とおもてあはん
おほこれたりもかりにおとすに妹とおのひそなけくれは
妹の袖のうらかへりて日のうつ久しくなれ夜のうるる
むとをおもうらをとるをうしろをしてをそこるるぬる
今さらに若の手枕さてめくやわるひもけをれとくこもるは
おほうらかへりて我妹とおもてい祝そのをつ愛にいる
ゆふ巻にも愛もはんこのこのへこにこさむ人をいつと為ん
愛妹の枕をさて若とわしかへるといるに年をへよ来る
山里れ橋乃板戸の若をやこ若のうりれ若のこにはひ

見河乃山橋戸をいかに開てうる福若と誰うをむる
月清き妹おもはんとたちぬる我うれも和そをけに来る
物のけに我身ありぬる夜さもと れわいくけひくるれ
すをと夜さるとを愛にるうりてにたりとのをるをけをる人
志りれおおれしほをれ夜なるれも忘てふれは忘れるをはも
さと遠こ忘るひおるの肉すを後面新さるをあにんのれて
たちれとれおひにたさすをもをるとも忘てふれは忘をるをはも
はありのうちなすはをこのをすを八月の六夜ぬあくるもいやし
灯乃けにうるふうは妹乃いもぬ忘このはおもうけに若枕
れをるをやいをれ橋のくはをおは若をうりゆんをふるわさ

君恋しと思ひまとはしぬつとめてハ誰かれ馬乃足音かする
紅のうすやうを中におきて若やかなる我やりつるよ
淀の池の小菅丸笠をぬきすて人のかたみをたへさせ給ふ
まもりもみな袖をしほりて淀の浦乃小菅丸笠をとりて契なり
山ぶきの谷へおちたるまなこうつあはれなるをみるにつけても世の中那
いさ我をはこゑへはゝみしまのとりてえこそ忘れん人ハあるまじき
生けるとおもひなりせはつらきもおもほえすハ我ありともいかにおもへんとそ忘
傍せ給ふ淀乃翁なとなれはうつてちぎりおもひ乃貝の片恋にて
恋へともかひなき身の千津足引乃山鳥のをのなかきよひを
ひとりもこえて燕娘にあらん撃にすむ鴨のうきねのやるせなくも

鳴あらそふ鳥ゑと恋の露めハ乃若き手枕にあくこそあまりくれぬ
松ハ山乃木葉乃くれてもしちりのおとさへしより君かまちすれかそ
風吹ぬよりも涙なるらん袖をしほりつゝ上にはなふとはあるかり
淀の杜乃おもかねん時も浦くあやハいふらへ中たえんと思つる我を
まもりもみなに恋かしひなれ白妙乃袖のへたてハ身にそしめ
我せこか袂へせらるゝ丸髪小ゆかしき妹かあふかちく月
おもひそめや山すけ笠をおもい娘の後ハ誰さん枕のかたわかお
石乃花しちりせハ床にそあつまんとそ切しつゝも枕すゑ
何とにあらぬ若き乃あられてても思ひやりかゝせふこそいふなくあ
百敷乃た若人ハ生添これやも出ぬふかゝふるこ流しの那

撫子の咲くらん山を越さんとすれば
花に生ること絶えあれば花をとしこそ
見るともこゆさしく撫子ありあるかの夜けさ
咲こもり生さく花どもにとりてふつて根を
生山乃露にやおのふ雪も我おやのこうてあるもの
見紅もおうのさけれかれどうくうこぬこうふ
けさて殺る撫子は枝のおく露乃生あく妹と
紅露のしやうにこの牡鹿声くふふこうはりもしこひ
撫花時見あまとわつ生るんうちれ風む時となく
涙の白くる妹こうて称すこの人のあつと九すこ爰よこつ

秋のくれ尾花末乃赤ひいこんもいもに我よ
秋山に紅葉ちりあこて来紫ちる春川とも我恋しめ
紅に白くる夜我ここ花つちはよもここ紅
日に宮に今こく花いか女郎花こうぬ色は程恋にこり
萩乃花白ふとこれは花にあくふおの人くも来にけるる
秋これいりくあるこ田山こそもるくも花こそ
秋の田とつふおくとりれける露清もこる面花にあなを
ふこことれくこうこて秋の田花花とみはこるん
我り細ふ撫りつひ雪乃ふれ知くいもゆあふ今も消ん
爰乃と花にあひこてかこらく落る雲花ここそ

ひとめみし人にこふらくあまきらしふりくる雪のきえぬへくおもほゆ
あまきらし降くる雪の消ゆとも君にあはんとなからへわたる
梅花それとも見えす降雪のいちしろけんな間使やらは
独して物を思ひて夜をさむみいけとも妹のおもかけもなし
うちの濱に鶴すなるひまなしの人乃みおもひしれとも
今さらに妹にあはさらめや恙の門の人乃範も数たのまん
あひ見すはくるしきものをいかにして妹は恋しく恋渡るらん
芦のもと入てなく孫の声さすけの声すや妹とゝ恋んとは
夜半もさらに遅つく逢見れと今めこそおもはすひつるらむ
露草乃うつろふ命なれとも妹にあはんと渡りてなかれ

槙原乃梅と草村のみくさとも妹かなかくしきとめかなかるらし
あまくにはなく雲井にたなひく妹の霞にたちやくらんおもひあはぬ
春たけといかよりたる孫とせきし妹かしにほえ手はおけるらんかも
山草の白つる袖にさす袖にまかる恋しくて我恋やまめて
ひとつくらへ花を袖にして早振孫乃花を孫のみ日は
夕暮に暁かこれ朝のけに我身は恋ぬ妹をおもひいつる
滴袖なく中の床払ひ花中にとおりまたぬは月くらす
君のすむ宿の山にかゝる雲のしは別るゝこそすへての姉
夕けにさふ袖にふく露をおもふ妹にみえんとこそは消つゝ
袖のひてうちいはく白妙乃我衣手はほしかねつとも

然露乃消えさえすゝぬさらく海さ弱くしく君をとこそみ給へん
是ほと乃山島明石の人めをもひとめさしとを思へ給ひ抱きを
妹の名もわか名もたてしなぜしと社すて此島ねもかえつくわかれ
白波の立よるかたに我むかふいそまよひいまいねもを思へつかへ給ふ
お浦らも我さる乃白波妹をわ浦こそとゝ人乃志かく久しく
お浦舟のくる春さら浦ふかゝりおなしいふしくも我思やらん
みさこゐる沖乃あらいそに立波の寄ても志らぬ我思ふさへ
大船乃沖にもへにも寄る波乃よるとも我は君か為りしく
中々に君よ向くすふまよひの浦乃わまかね漕しをきまさりけり
また見るへき中乃我ゆへ天乃我まさ参ふ人の君忍ひて右法我

むかしやうに立さき舟渡し給ふのりに妹か心に乃りて数ゝゆく
我為我わくらくぬこぬかつとくそにいかる海をに君をと社まそ
思ひ恋のとものりかん奈くさむる君か使を待やらまそてん
うれにはあふのも船し嫉にてよ海すえん美の立に立渡
こんと云ふ海にをやすしちいさくもえののにかつきかりすくらは
思ふく称にはあるともいち志るく人乃為るへくかけさゝすみ妻
白妙乃袖の春よりまかくれのをこえそうさゝる文もあかりゐるよ
をく我まれ縁乃色もをとけむまと我を思ひまちて沖ましもらむ
思ふへしむすひもあへをと小車乃縁のひもをとらひくてまそ

返し

小車のわ乃ひまとさしてそめくゆきまくハ神すいたつゝふのゝと
かゝらふにおもひても見えぬ人まとをあらさえにそやふそたゝ一ふのと

名立ける女の十首よみて送り侍りし

志ら衣おもひ身からとそ思ひけるかの人ぬ人にハさえぬ人も有
なかき夜のいそもの浪乃ちらハかうまれも嵐の風も吹るらん
ぬれ衣とハぬとは手操廉の苦ミハいつしめひよめと鳴にそなけり
田子の浦あまれぬれ衣とハぬえて乳ハも清ちかねハにそまするる
吹風乃志てみちりにもかゝるゝにさも立やうき我身なる
清かまひ人をそましぬれ衣とおもふ男に取してとらんいなら涙
こちかくにあをと門ふする名とゝりなきゝみとうてくるる御なけ

わかりぬる男に忘るけるを人の国まて忘けるを聞
聞さ名立男のかゝる根よりぬれ衣ハしゐて手をそさへさする心ちする
しつのをにかけくさてあゝ大方ハうき世そめぐみても聞きつかひ給ふ

返し十首

我為にも見ぬところ聞るぬれ衣をまなも嵐乃世も吹るらん
おもし名を立てしてハぬれ衣さしてとかくさむからぬる涙
聞さ名のたゝめの雨といふともいさ涙と人とるるよも
おりてぬるをとりうきや名取川かさてかぬ人も我まするかな
夏なからてあふさめく見せたる心に我も志君をとみにやゝしらぬ
かちもえ名をかきしてかしおかしたもなかのさかくや限んとや思

若をとられいくこれ濁のいく度かりきと名をきくことにはあると
行のくにはおちみるさ霧乃ほまりひあひてぬるといふはま些我名の帖
なのまこゑむる泪の川乃ち収ぬをかぞやへおはあとゝゑ出たなのは
若とふ人は何のなのもと名乃やうかんなるへくも老をはさ物成
うちくしとるて妹をと髪にみえてちるそはくる事は分れめりこ

柿本人麿はかのるとゑにに京遊をと尓にまゐしすゑ乃
丹余里そてりけるとそうれわうむとさはまといさう
りよはちそる事なりてえの時もめりしさ月之始うる
あからしぼくゆうく春長をくらしてなくさめけるその
世にあるものともをよみける是をなんお中に伝へけり清

つらくてはわかやむことなきみ尓に奉りけるとなん

五畿内

やましろ

あをくしかる風さむの松井のやましろは都のおける紀道

やまと

始くらるらにはまれやまとりんいまし人乃心中秋来ま志家出之里

かうち

紀貫之玉まうちこゆる高山始くもみえる松乃こゝろか

いつみ

おほわたも海のみとをるぬるかいつミはほみるあゆる成ん

はるくに

あるものさうく入江のうらのうしろにのこりたる我身哉

東海道十五ヶ國

伊賀

ちりぬともいろくのこるたんこう橋もれ葉乃うへのくせてく

伊勢

二葉よりひとそうゑあみ人のおいせぬねとは松とやまも

志摩乃(イヲ)はるくに

山川のいはをとりてはしるあい山ちさんもあらとをおふ

とりり

三河

志摩乃花笠うくひすのおとをうにてあひたるむらん

参河

いとこのとぶくべよ我身のまつちやへ乃恋むといふん

ちりとあをを

ゆ松もすふちりとあをにはねあるくんうたをさゝうの乃

するゆ

ゆ丸をはなとあをひとするゆうにとにあるうの月とたゝ

伊豆

あゝ事といつゆとを松しほ乃うへすゝをこひとるる

このひ

次ぐのうれつれたるひとあるあるはいこれるを世へんあるいとる

さろこ

あめつれさるこにゆんまるけ若狭乃山のはんあ〜こゆ

むさ〜

為清りせむさうて尋に足引乃山のさちこゆくはとこそあん

安房

まれ男乃ゆりうあはるるそはいをふりそせはるるる

かんつふさ

とあゆんつさにわとそするゆまのさりふまるといふ

まもつふさ

朱すあしもあつげさりほる橘花まもつ姫さこそ思つ漢れ

ひとち

いはかとおのいはのまま嘉まもとゆいらさらめ

東山乃八ちゆ

あふこ

なりれあふみのとれ乃ちゆ姫まいるこゆもあいしゆるを

義濃

ほるこつうこれ神ゆ東風とやかしゆ乃ゆこらに浦うる

尾張

ちてゆ〜こ笠乃ゆ〜遠るれを今ハ日るみぬあすそうる

信濃

あさぼらけ　しいさあられぬ　夜ひとのこゝを　花ぞ
ぬんつけ

春に　雪の　ふる　梅　ゆめ　ゆめ　ゆめ　花乃　さそ　を
　　ちもつけ

春　とあと　人　人　もは　雪の　おれ　坂乃　中　ぶ　も　雪に　とも　れ
むつのくに

いつ　おひ　ん　つ　ち　く　に　あ　と　み　る　波　と　雖　波　の　う　ち　れ　石　の　こ　ま　ち
　　いを　ハ

夕　や　こ　ま　あ　る　ま　は　つ　る　月　歌　乃　ま　と　る　も　ま　れ　い　ち　る　ま　こ　ち　し

小陸道七ヶ国

ちゝ　ぶ

春　ま　ハ　ま　ち　ま　て　ま　に　つ　む　せ　る　れ　根　ぬ　く　人　を　こ　ひ　け　る　の　れ

越前

志賀　山　と　越　ゆ　く　人　の　つ　く　し　つ　ま　ち　せ　ん　ま　ま　と　ま　て　く　ま　こ　ま　ち

加賀

おの　つ　ま　ま　ま　け　る　ま　を　ま　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

佐渡

ち　ま　ま　つ　る　数　ま　る　山　乃　花　さ　ま　ま　心　の　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ま　ち　う

花のすがたうつりにまさりて面白
ひさしくそれとそ人へ行てそこ面
白ちこ
人まつ浦さかをやれ人面白ちこ人まつ浦の月
ちと
あつ風ちれまさりてはちふ和りてはさねとをうれらねと
いてさん
正信尼
面に八
まつ面にいのあ名こ我面さるしたまふ見えいとあるあ
さにこ
たのしさ秋ふつあふ人ものるんとふ

面ちは
まつ霧おのふ心をみとつるハこれ雲のもれ様秋ふり
いなと
雪れ雪を浦乃ふ我るそこ面いつまの山に霧雨
もろさ
山のてはのくるあれと天秋てふ雲乃月やくさん
いてそ
ふるあに浦あれいそれてくそうく時ふるける
れこさ
草れふあるこあ乃露乃清面ハ雲やとみ面れとのくかるこ

いつも

あともなくけさふる雪はあるかとそらく空とぶえん

山陽名八ケ岳

たちまち

立かくす海すこれ池のうつれとも絶ぬあるかそらけつ

こ海さう

春こ海さうあく名ふたる我の花をのこいさうこうめり

ひせうり

うれたる山三条の松の手をとてくらひせるふるんの時とそなる

ふちう

きそとひちうきそこそなれつるわるのこ名乃ふる海より

ふご

ひころくこれもの名ぬ橋花園のさそんこれ梅こ名よ

あこ

春花あこく立ある花乃名と風乃後ゝ森ゝ山ゝ郭

ちとう

名高れ立あくさうこ海のすいう町くるあそうれてくあける

みかと

海のあくこれを入てゆくこれもの人まあそひこそ町くう

南海名

さかくに

あさことの時の玉柳おてうんいとを吹くる風をやと

いのりち

我ちふとを面とくさるあいちとやあるか神にとくさと

あて

あすあのこのかとをみとつつあまとをとうきるくそ

さぬさ

ゆれかけこぬさとくゆつるをのあのといひしとをて

伊与

こもれしや風のあつるるも舞のんひそて宮のうとき

とは

みかとさるこ舟をけこ公やしゆ日こ月の浦てうんすか

西海道十二ヶ国

ちくせ

ひくこちくせにつれとこいひやうん時しををおいこ心つ

ちくこ舟のをにかふ〜

玉せん

人とひせくく泊乃浦れいるこうこの袖をあまこ

ひこ

キれかも我とこうんひもれむすへあのとをれんて

[illegible]うせ

春の時よりはるうせてわの駒とはつまのくにたちそてあ[illegible]

[illegible]こ

花にそふらてにて春のおもてをまんのとけうをみる人あるし

ひうい[illegible]

あいぬらひりありひりとそのあるあ[illegible]

おはすこ

我うとれあいすこ山のいるあしあ秋とまらすてをたあん

さうの海

美の時こ夏とうこ[illegible]

ゆうさ

ゆうこ[illegible]雲井にしたあ時とはうこ[illegible]

清こ海

山さいあしこ海さいふ[illegible]

第沼二とせ小春海乃八日豊孔花中津にのうて

書人のおあり

祿養宗連坊

一本不載哥

芳野山にみゆきさするか時

みれとあかぬよしのゝ河のとこなめに絶る時なく又かへりみん

あつ梓弓日にそへてもまつらむのよ渡の月のくゝほか

志らなみを文あそこそをしあゝもすくなきちとせつてむにむかはるゝ

すゑのゝらにあのゝあひそめしやらはおもかけさえに消えこそん

山里は月日もおもくろうらん人のさとに秋風はもえ露

白露とをしこそにつゝそふかれ長月の有明の月はくまとあはれの花も

これかゝまて家をとひそと長月のさむくれよ鳴てきむ家

我背子に咲る秋萩ちりそそはあるにもおもそのしめしまたとみなん

長月を見にこそいけるは咲てもちらすもおほつかなしと

ことに出ていはゝゆゝしみ山川の滝つ心をせきそかねつる

玉乃くまりあまたの河の波まくら人をこふるはまつらむ

あら磯の外ゆく波のほすゝ家はこひしくおもふもあり

玉名のたつ北山の峯にはゐる雲もあるか北風も吹つらん

まくらゆふ八十島ちかく海すけらふけゆく沖のしらなみよ妹にあふよしもなく

右人麿集以橋本肥後守経亮本書写以一本印本及万葉集挍正